



三愛学園

児童養護施設さんあい 一時保護施設 三愛子ひつじ寮

社会福祉法人 三愛学園

〒369-0212 埼玉県深谷市櫛挽 15-2

Tel 048-585-0605 Fax048-585-0562

Mail san-ai@isis.ocn.ne.jp

URL san-ai-jidouyougo.org



SANAI0605

「法人養育目標とさんあい祭り」

社会福祉法人三愛学園理事長 高瀬一使徒



50年前に定められた法人養育目標は「思いやりのある子」です。その後、思いやりのある子に育てもらうには思いやりのある職員の存在が不可欠であるということから「思いやりのある職員4か条」を定めました。これは法人の求める職員像で4つの柱があります。すなわち、①子どもを思いやる職員、②職員を思いやる職員、③自分自身を思いやる職員、④地域や社会を思いやる職員です。①～③はわかりやすいですが、④はわかりづらいかもしれません。地域や社会を思いやるとは、地域の一員として自覚し、行政、学校、自治会等近隣の方々との良好な関係を構築すること、また法人の支援する子どもたちばかりではなく、広い視野を持ち地域やその外にいる社会的擁護の必要な子どもたちを思いやる姿勢です。創立記念祭（さんあい祭り）は地域の一員として皆様に感謝の気持ちを表すとき、そして良好な関係を構築することを目標に法人草創期から受け継がれています。同時にさんあい祭りのバザー等の売り上げの一部は、タイの児童養護施設の支援や国内外の被災地への支援に用いています。売り上げの一部をこのような目的のために用いさせていただいていることは、お祭りの開会式や年度ごとの事業報告書で支援者の方々や職員、子どもたちに共有しています。「思いやりのある」とは、心のありようではなく実際の行動です。その行動の場としてさんあい祭りは大変に重要です。

養育目標の「思いやりのある子」を定めるにあたり聖書から引用した言葉は、「自分自身を愛するように、あなたの隣人を愛しなさい」というものです。この言葉は私たちが助け合いながら平和に生きてゆくための普遍的な教えであり、多様性の否定や分断そして争いが拡大する世界にあって問題解決の道標になり得るものです。この教えで重要なのは行動の同時性です。つまり、まず自分自身を愛してから隣人を愛するのではなく、自分も愛すると同時に隣人も愛するのです。この同時性が無ければ何時までたっても他の人を愛する行動を起こせません。“もう少し余裕があれば、もう少し安定すれば他の人にもできるのに”と行動に移さないのが人間の弱さです。しかし、自分自身にも課題はあるけど今できることを他の人にする時により大きな有用感を得ることができます。こんな自分でも他の人に役に立つことができるという満足感や幸福感です。これらの満足感や幸福感は自己肯定感にもつながってゆきます。

数年前に高校を卒業した子は、退所時に自分がそれまで収集した好きなカードを売って、そのお金をさんあいに寄付してゆきました。また、さんあい祭り際には、必ず何人かの卒園生や元職員が休日にも関わらずボランティアで駐車場係や厨房、売り場係を担ってくれます。これらの行動は法人養育目標を体現するもので何より嬉しく思います。



ゆりかごから墓場まで

さんあい 施設長 平本 実



「ゆりかごから墓場まで」は第二次世界大戦後のイギリスにおける社会福祉政策を象徴する有名なスローガンです。国民の出生から死亡までの一生を通じ、国が生活のあらゆる面で手厚い社会保障を提供することを目標にして掲げられた言葉です。

児童福祉法は児童養護施設を概ね 2 歳から 18 歳までを対象とする施設と定める一方、改正児童福祉法では従来の年齢による枠付を撤廃するとしています。実際、職員と子ども達とのかかわりは退所後も続きますし、生い立ちについて一緒に整理する過程で出生や家族のこと、もちろん老いや死についても話題にしたり、関わったりすることがあります。核家族化が進み、子どもたちが老いや死を間近で体験する機会が減っています。施設の中にいればなおさらのことです。故に私たちの仕事にはライフサイクルの視点は不可欠です。必要に応じて、子ども達の様々な疑問に答え、感情にも寄り添える大人でありたいと思います。

先日、歴史のある施設を見学した際に、敷地内に納骨堂があるのを発見しました。敷地の外ですが、さんあいも墓地を持っています。創設から 50 年経ち、そこには高瀬美武初代園長、高瀬美彦初代理事長をはじめさんあいの元職員や卒園生の遺骨が納められています。

人間は地球上の生物の中で、唯一、遺伝子以外の方法でも過去の記憶を次の世代に渡すことをしている、と言われます。墓地を訪れることを通して、創設者やその理念に賛同した職員、そして共に生活をしてくださった子どもたちに思いを寄せ、残していただいたものに感謝をするとともに、その記憶を次の世代に伝えていく決意を新たにする機会としています。

~~~~~

## 心の土壌

さんあい FSW 高柳友一



創設者の故・高瀬美武先生が社会福祉法人三愛学園の理事長であった当時、職員会議で『聖書から学ぶ』として先生から聖書の内容と、当時の社会的養護の課題等を擦り合わせ、職員の内面的な意識や姿勢についての“あるべき姿”へのヒントを話していただく機会がありました。その中で今でも心に残っている話があります。

「種まきのたとえ」(マタイによる福音書 13:3~9、18~23)として、同じ種でも落ちた場所が①道端②石地③茨の中④良い地の違いによってそれぞれ種の状況は変化するという話がありました。もちろん良い地に落ちた種は何倍もの実を結びます。要約すると人それぞれの受け入れる土壌の違いによって、物事の受け止め方や実の結び方に違いがあることを教えてくれています。

さんあいの 50 年の歴史の中で、本園では 360 人、一時保護ユニットでは 260 人を超える児童が生活してきました。それぞれさんあいに入所するまでの経過は複雑なものがあります。そのため、子ども達の心の受け入れる土壌は決して良い状態ではないことがほとんどです。さんあいでは生活する期間については、一時保護の児童では一晩過ごすだけであったり、数カ月~1 年以上に及ぶこともあったり、本園の児童は 2 歳~18 歳の 16 年間過ごすこともあります。在園期間は子どもにより様々ですが、どの子であってもさんあいでも過ごした日々の中で、心の土壌が少しでも豊かになり、社会に出た時に良い種を受け入れられるようなきっかけになってくれることを願っています。

社会的養護の課題は時代と共に変容し、課題を解決するために様々な対応が必要となりますが、子ども達の健やかな成長を願う気持ちは 50 年前と現在でも同じです。さんあいの児童養育目標となる『思いやりのある子ども』を大切に、子ども一人ひとりのニーズに寄り添いながら共に成長していきたいと思っております。

令和8年度

# さんあい祭り

50回目の創立記念祭（さんあい祭り）をたくさんの地域の方々、支援者の方々にお越しいただき共にお祝いできました。また、今年も準備から片付けまでたくさんのボランティアの方々を支えられ、無事に開催できました。心より感謝いたします。

さんあい子ども達、職員がこの日を楽しみに準備をしてきました。また今年もご寄付をいただいた新鮮な野菜やバザーの品を販売させていただくことができました。他にも飲み物やご寄付を賜りましたことも、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました！

さんあい祭り終了後には同窓会も行われ、卒園生や元職員の元気な顔を見ることができました。



## 2025年度活動報告

社会福祉法人三愛学園の3つの事業拠点から、2025年度の活動をふりかえり報告をいたします。

### 児童養護施設さんあい・女の子ブロック

令和7年度の女の子ブロックは、幼児3名、小学生7名、中学生5名、高校生3名の計18名の児童と、新任職員3名を含む14名の職員でスタートしました。「ねむのき」の地域小規模化に伴い主任2人体制となりましたが、従来どおり「いちょう」「ほぶら」「ねむのき」の3部屋は一つのブロックとして、職員同士が支え合いながら子どもたちの生活を支援し、大きな事故やけがもなく、子どもたちは安心して生活することができました。



ほぶらでは、感情コントロールに課題を抱える児童への対応に苦慮し、職員にとっても大きな挑戦の一年となりました。しかし、チームで支え合うことの重要性を再認識する機会ともなり、ディズニーシーへの旅行など楽しい思い出をつくることもできました。また、高校3年生が志望校に合格し、将来の夢に向かって退所したことは大きな喜びでした。

いちょうでは、音楽が好きな児童が多く、リビングでみんなで歌ったり踊ったりする姿が見られました。ホームでカラオケ大会も実施しました。ホーム外出ではよみうりランドや川越散策に行き、煎餅作りにも挑戦しました。高学年児童は、携帯電話やパソコンからの情報に惑わされないようネットリテラシー教育にも取り組みました。



令和7年1月にスタートし、実質的な1年目となった地域小規模ねむのきですが、新しい環境の中で、どうすればより家庭的になるかを模索する一年でした。特別部屋外出は、今回は夏と冬に分けて実施。夏は山梨県へフルーツ狩りや桔梗信玄餅パーク、ほったらかし温泉へ行き、冬はラウンドワンのスポッチャへ行きました。新しい環境で高校受験を控えている児童もいたので、気持ちが切れないよう支援し、無事に進学が決められたことは感謝でした。

### 児童養護施設さんあい・男の子ブロック

令和7年度の男の子ブロックは、新たに1歳男児と中学2年生男児を迎えてのスタートとなりました。長らく1歳児の受け入れはなかったため、職員は発達段階に応じた関わりや事故防止について学び、看護師や栄養士から助言を受けながら、安全面に十分配慮し養育を行いました。



今年度は、子ども同士の関係性や発達状況を考慮した居室編成を行いました。かしの木では、小学生児童の希望に応じて地域の少年野球への参加が可能となりました。もみの木では、1歳児の受け入れに伴い落ち着いた生活環境づくりに努めましたが、職員の異動や退職の影響により、子どもたちが不安定になる時期もありました。ひのきでは、活発な児童が多く、日々の見守りと支援を丁寧に行いました。

昨年度末に経験豊富な職員が複数退職したため、今年度は異動職員を含めた新たな体制での運営となりました。年度途中にも退職や配置変更があったため、子どもたちへの心理面への影響は避けられませんでした。新規採用職員や他部署職員の協力により体制を整え、年度後半には安定した養育環境を維持できるようになりました。



また、高校生児童2名が自立援助ホームへの移行や家庭復帰を果たし、年度途中で新たな生活へと歩みを進めました。さらに、入所当初は情緒面や学校生活に大きな課題を抱えていた小学生児童が、感情のコントロールや生活面で成長を重ね、家庭復帰が実現しました。退所した児童の後には、新たな児童の入所もあり、子どもたちは少しずつ新しい環境や仲間に対応していくことができました。

## 一時保護所「オリーブ」

一時保護所「オリーブ」では、男の子・女の子それぞれのユニットにおいて、子どもたちが安心して生活できる環境づくりと、保護中で制限がある中でも様々な体験ができるよう努めました。

4月、男の子オリーブでは、職員体制の変更を経て新たなスタートを切りました。公園外出や入園・入学を祝う会、いちご狩り、白バイ乗車体験など、さまざまな行事に参加し、子どもたちは楽しみながら社会経験を積むことができました。また、定期的な外出機会を設け、自然体験や地域との関わりを通して社会とのつながりを感じられるよう支援しました。一方で、職員不足により9月から一時受け入れを停止しましたが、12月に新任職員を迎え、受け入れを再開することができました。

女の子オリーブでは、4名の職員体制のもと、一人ひとりの子どもに丁寧に向き合う支援を行いました。学習面では、ボランティアの協力も得ながら個々の理解度に応じた学習支援を実施し、子どもたちの成長を支えることができました。また、日常生活では遊びや会話を通して信頼関係を深め、家庭的で落ち着いた生活環境づくりに努めました。

さらに、職業体験を兼ねた美容室やネイルサロンの見学・体験、農場での活動、動物指導センターでの学習など、様々な体験活動を実施しました。12月からは子ども会議を定期開催し、生活上の要望や意見を聞き取りながら、ルールや環境の改善につなげました。

今後も子どもたち一人ひとりに寄り添いながら、安心・安全な生活環境を提供するとともに、様々な経験を通して成長を支える支援に努めてまいります。



## 自立援助ホーム「三愛子ひつじ寮」

令和7年度末の在籍者数は、定員9名に対して4名（男子1名、女子3名。うち一時保護委託者は0名）でした。年間の受け入れ人数は8名で、うち一時保護委託者は3名。その3名の内、入所になった者が1名、退所となったのは2名でした。年間の退所者は4名で、退所後の行先としては一人暮らしが2名、Ⅱ型自立援助ホーム入所が1名、児童相談所の一時保護となった児童が1名でした。入所者は2名で、内訳は児童養護施設から1名、里親宅から1名でした。



利用者支援においては、一人ひとりの生育歴やニーズを丁寧に把握し、主体性を尊重した支援に努めました。児童相談所、医療機関、学校、就労先など関係機関と連携しながら、補助金や障害福祉サービス等も活用し、安心して自立へ向かえる環境を整え、退所後も継続的なアフターケアを実施しています。誕生日やクリスマスなどの行事では、プレゼント選びや料理作りなど自ら選択し参加する機会を大切にしました。また、リビング環境の改善を行い、より快適に過ごせる生活空間づくりを進めました。

職員体制では、外部講師によるスーパービジョンを実施し、自立援助ホームの役割や運営方針を見直しました。パート職員の増員により業務負担の軽減を図るとともに、休暇取得を促進し、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいます。また、他ホームとの交換研修を通じて職員の資質向上にも努めました。

財政面では、各種加算の活用により安定した運営を図るとともに、進学する利用者への支援制度を活用し、自立生活への移行を支援しました。防犯対策として玄関扉を付け替えたほか、事務機材の見直しによる経費削減にも取り組みました。

地域との関わりでは、日常的なマナー指導や地域美化活動を継続するとともに、関係機関への訪問を通じて自立援助ホームへの理解促進を図りました。法人からの継続的な助言や支援もあり、円滑で安定した施設運営ができた一年でした。



